

知求会ニュース

2023年9月

第87号

◎ 掲載記事紹介

1. 下野新聞（令和5年5月6日）3面に、「本県の外国籍などの生徒 高校受験 日本語が高い壁」と題して、「県立高全日制 在籍4人他県に見劣り」「特別枠 導入求める声も」の内容で田巻松雄先生(国際学部名誉教授)の記事が掲載されました。
2. 下野新聞（令和5年5月21日）20面に、『みんなでつくる とちぎ防災』コーナーで「ダイバーシティー」「留学生に災害の知識を」「視点の違いを発見」と題して、「まちあるき 危険箇所を確認」の内容で飯塚明子先生(留学生・国際交流センター准教授)の記事が掲載されました。
3. 下野新聞（令和5年6月13日）1面に、「アカガネのこえ 足尾銅山閉山50年」コーナーで、「①継承」「期待集める宇大の活動」と題して高橋若菜先生(国際学部教授)の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. 下野新聞（令和5年7月9日）26面に、「那須塩原 脱炭素 市内の現状紹介」と題して、「宇大教授らが調査報告」の内容で高橋若菜先生(国際学部教授)と遠藤千智さん(国際学部3年)の記事が掲載されました。
2. 毎日新聞（令和5年7月26日）21面に、「脱炭素取り組み」「調査結果を報告」と題して、「那須塩原市に専門家」の内容で高橋若菜先生(国際学部教授)と遠藤千智さん(国際学部3年)の記事が掲載されました。

◎ 新刊案内

1. 国際学叢書第14巻『外国人生徒の学びの場 多様な学び場に注目して』佐々木一隆 / 田巻松雄編 下野新聞社刊 2023 03 31発行
2. 『感性論の展開 ノヴァーリスとその時代、そしてその先へ』高橋優著 春風社刊 2023 3発行 <http://www.shumpu.com/portfolio/946/>
3. 『ドイツ語圏のコスモポリタニズム 「よそもの」たちの系譜』菅利恵(編) 共和国刊 2023 2.25発行 高橋優先生(元国際学部講師)は第2章を担当されました。
<https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784907986049?fbclid=IwAR1aEHwM1vzO7oaf4JHBh1YFyfU1f0G7JAcEwrcNd9DpJsGdX61f2ZdwuWA>

※高橋優先生は現在、福島大学人間発達文化学類人文科学コース准教授です。

◎ 放送大学栃木学習センター面接授業

1. PRESENTATIONS 2023年11月04日（土）1時限～4時限
2023年11月05日（日）1時限～4時限
ジョシュア アレクサンダー キッド先生（国際学部准教授）
2. アメリカ経済と連邦保険制度 2023年12月02日（土）1時限～4時限
2023年12月03日（土）1時限～4時限
磯谷 玲先生（国際学部教授）
3. 現代の国際政治 2023年12月03日（土）1時限～4時限
2023年12月04日（日）1時限～4時限
松村史紀先生（国際学部准教授）
4. アメリカの文化と歴史 2023年10月21日（土）1時限～4時限
2023年10月28日（土）1時限～4時限
米山正文先生（国際学部教授）
5. ことばの多様性と普遍性を探る 2024年01月06日（土）1時限～4時限
2024年01月07日（日）1時限～4時限
佐々木一隆先生（国際学部名誉教授）

特別寄稿

この度、高際先生の訃報に際して佐々木一隆先生に寄稿をお願いしました。なお、高際研究室出身の同窓生にも寄稿を依頼しましたが、残念ながら実現しませんでした。

「高際澄雄先生への追悼の辞：思い出を語りながら」

宇都宮大学名誉教授 佐々木 一隆

令和5（2023）年3月30日に74歳で逝去された、宇都宮大学名誉教授（同大学在職中は教養部および国際学部にご所属）の高際澄雄先生に心より哀悼の意を表します。先生には、私が1987年4月に宇都宮大学教養部に着任以来、大変お世話になりました。思い出も数えきれないほどあり、ご家族・ご親戚のご心情を察した上で、本学および地域社会や国際交流の面で先生が果たされた多大な貢献と功績を考え合わせると、とても残念でなりません。

2014年3月に刊行された『外国文学』63号 高際澄雄教授退職記念号では、「高際先生に贈ることば」を長い副題（「博識な英文学者、有能で情熱あふれる英語教育者、物事の表裏をわきまえた組織運営の推進者、郷土を愛する先生に敬意と感謝を」）を添えて、書かせていただきました。本追悼文では、贈ることばで十分に語れなかったことを補ってから、退職記念号では取り上げなかった思い出やそれ以降の出来事をご紹介します。

まず、贈ることばの補足から始めさせていただきます。上記退職記念号には、科学研究費補助金による研究成果の一環として、研究代表の高際先生が自ら書かれた物語詩に関する

る論文「バーレスクオペラ『ウォントリーの竜』の元歌」が掲載されています。日本では知られていない元歌について論じたもので、序のバラッド『ウォントリーの竜』を受け、第1節の導入部、第2節の継続部、第3節の展開部、第4節の終結部について、バラッド律[強弱四歩格と弱強三歩格を繰り返す、脚韻に abcb を持つ4行で一まとまりとなる韻律]2つで1連(8行)を形成し、19連で完結する作品を、各連に先生自身による明快な日本語訳を提示しながら解説と考察を加えています。結びでは、元歌との比較から明らかになったバーレスクオペラ『ウォントリーの竜』の特質を鋭く分析しています。そして先生は、ドイツで生まれてイタリアで成功した後長年イギリスで活躍した作曲家ヘンデルの研究者が当時の演劇界の変化を十分に理解していないことを惜しむコメントをされており、そこには英文学者としての洞察と真理探究への思いを強く感じるのです。

次にこれ以降は、2014年3月刊行の『外国文学』退職記念号の贈ることばでは取り上げなかった思い出や退職記念号以降の出来事について語ることにします。

高際先生は授業や論文指導に限らず学生を大切にされる方で、いつも敬服しておりました。学生と一定程度の距離を保ちながら、時には厳しく、時には優しく接し、本質的に学生との交流を楽しんでおられるところが絶妙でした。1999年4月に国際学部国際文化学科5期生が入学し、先生は学年指導教員の一人になりました。卒業記念パーティー開催準備の後押しも含め、卒業までの4年間学生たちの面倒をよく見ておられました。前面に出て学生を引っ張ることもあれば、裏方として学生をうまく動かすこともありました。私がさらに感服したのは、こうした学生との交流が卒業後も続いていたということです。「宇都宮大学国際学部 国際文化学科 第3回 同窓会」プログラムが私の手元にあり、これを見ると、先の国際文化学科5期生約20名が、卒業後5年ほど経った11月に高際先生を囲んで3回目の同窓会を開いた様子が分かります。2日間の日程で、同窓会は初日の午後に母校の国際学部英語系資料室1(旧比較文化図書室)で開かれ、私も短時間でしたが参加し、久しぶりの再会を楽しみました。「原点回帰」がテーマでした。この同窓会開催から見えてくることは、高際先生の才能と人柄に起因する指導力のすばらしさと優しさです。卒業後も会長を中心に皆で協力するチームプレーにより3回目の同窓会も実現したのですから。宿泊地はろまんちっく村で翌日もそこで企画がありましたが、会場押さえから機材の準備までスムーズに行えたそうです。高際先生の裏方でのお力添えが功を奏したことは間違いないでしょう。

私の手元には国際学部の教職員や学生、国際学部と教育学部の英語教員、宇都宮大学職員組合の仲間と撮った集合写真やスナップ写真も数多くあります。高際先生は素敵な笑顔で写真の中心にいらっしゃることが多く、先生のお姿が写真にないときはカメラマンとして場を盛り上げてくれる存在でもありました。国際学部の行事は、新入生合宿研修、石浜先生の送別会、内山先生の最終講義と送別会、高際先生と友松先生の送別会などです。国際学部の英語教員がモリソン先生のご自宅で開いた高際先生を囲む会の写真もあります。楽しく微笑んでいる高際先生が真ん中にすわり、先生を囲んでモリソン先生、他大学に転

出されたデロージェ先生、市川先生、米山先生、非常勤講師の田中先生、ライマン先生、非常勤講師のチェンバーズ先生、そして私という面々でした。基本的には集中合宿で行われた「英語会話」（後の“Intensive Communication Seminar”）の担当者が集い、退職年度の秋に先生を慰労する趣旨で行われました。国際学部と教育学部の英語教員による送別会では、モリソン先生とチェンバーズ先生の肩に手をかけて満面の笑みをうかべる高際先生がとても印象的です。教育学部からは（1年前に退職された）浅野先生、渡辺先生、天沼先生、数学の酒井先生が参加され、国際学部からは先生の教え子でもある湯澤先生を含む全員が出席しました。また、基盤教育からベナー先生も参加してくれました。まさに多文化共生の縮図と言える和やかな会でした。なお、その1年前になりますが、教育学部が主催した浅野一郎先生最終講義後の懇親会で、浅野先生と高際先生（大学時代の同級生）と私の3人で撮ったスナップ写真も記念となるもので、それぞれの微笑みの表情が自然で特徴があり、気に入っています。最後に職員組合主催の歓送迎会の集合写真では、浅野先生を含む6名の定年退職を迎える教育学部・農学部・工学部教職員の方々が出席しましたが、1年後に定年となる高際先生も前列で晴れやかな表情で被写体となっていました。お子さん同伴で参加する人も何組かいる中で、部局や職種の垣根をこえて相互交流できる職員組合ならではの光景であり、高際先生はそうした組合でも長年にわたり私たちを牽引してくれました。

私事で恐縮ですが、私は宇都宮大学在職中、本務以外にも大切な活動を2つしていました。退職後も継続しています。一つは職員組合の諸活動です。執行委員長は16年前と定年退職間際の二度経験しました。もう一つは、自主夜間中学に関するボランティア活動です。同僚の田巻松雄さんの多様な学び（の場）の考えと実践に賛同したことがきっかけで始めました。職員組合については、高際先生は私が二度目の執行委員長をしていることを知り、定年退職後8年も経っていたのですが、研究室まで電話をくださいました。電話があったのは先生が栃木市長選に出馬する旨の記事が新聞で報道されて間もない頃で、電話を受けてすぐに私は思わず出馬されるのですかと尋ねてしまいました。先生からは、まだ正式決定ではないのでと戒められました。電話をくださった理由は、国際学部長を終えたあと、定年間近の私が執行委員長になったことに驚かれたのかもしれない。励ましとお褒めの意味も込められていたと理解しました。自主夜間中学についても、先生ご自身がその意義に賛同を示されていたようで、何かの折にお褒めのことばをいただきました。先生の長年にわたる地域社会への献身的なご貢献には遠く及ばないのですが、私のボランティア活動も心に留めて評価してくださったのだと思います。お心遣いに深く感謝しています。

高際澄雄先生の最終講義は2014年2月13日に行われ、題目は「18世紀のイギリス文化とグローバリゼーション」でした。講義内容は、家族親戚恩師に言及した生い立ち、大学での挫折と18世紀イギリス文学、英語教育観（中級英語の理解が不十分、留学の重要性など）、スモレットとヘンデルに関する研究、田中正造とグローバリゼーションという構成で、先生らしく各項目について端的かつ率直明解に講義されました。全体を通して先生か

らの感謝の気持ちも伝わってきて、感銘を受けました。ご講義終了後の懇談会にも参加させていただきました。その後 2023 年 3 月 9 日には私が最終講義（題目：「英語・言語学・国際交流を求めて」）をすることになり、高際先生は宇都宮大学の教室までお越しになって質問までしてくださいました。終了後にも先生からお声がけいただきました。講義へのお礼と、体調がよくないので懇談会は失礼しますという内容でした。後輩である私の最終講義にもご来場くださった律義さに感謝をしつつ、無理させてしまったのではないかという申し訳なさも持ちました。今でも複雑な心境です。

2023 年 4 月 3 日に営まれた通夜式では、先生のお人柄を反映して、多方面から様々な人たちが参列しました。ご家族・ご親戚一同はもとより、ご近所の方々、高際先生が亡くなるまで会長を務められた「谷中村遺跡を守る会」の方々、宇都宮大学などの学校関係者、職員組合や日本科学者会議の関係者などです。施主となられたご長男の高際裕哉様による口頭のご挨拶と御会葬御礼（書面）はすばらしく、参列者には高際先生への理解がいっそう深まる内容でした。私にとって、裕哉様が書面上の会葬御礼で語られた、父は倒れる直前まで世がより良いものになるよう祈り、様々な場に奔走していたということに感動しました。また、英文学研究で 18 世紀のイギリス産業革命の陰の部分としての環境問題に関心を寄せたことにより、父が足尾鉍毒事件や田中正造に近づくことになったのは必然とのご見解と父は何より皆さんと楽しく交わる時間を大切にしていたという点にも共感しました。ブログ「高際澄雄 早起き渡良瀬散歩」も検索し、「わがジャレットの記」、愛犬ジャレットとの交流や散歩の手記に次々に出てくる鳥の名前や植物、渡良瀬の自然の移り変わりや写真を拝見しました。先生らしい行動ぶり、動植物や自然を日々観察して気にかけて愛する心、そして体験に裏打ちされた豊富な知識をお持ちだったことをつくづく感じました。亡くなられたことが本当に残念で、寂しく思います。改めて心よりお悔やみ申し上げます。

追悼の辞を閉じるにあたり、私見を 3 点ほど付け加えたいと思います。まず、高際先生の外国文学退職記念号には米山先生からの贈ることばもあり、学術書としてはヘンデル、趣味としては日本酒についての著書出版を切望されていました。私も同感でしたが、今となっては叶わなくなったのが惜しまれます。次に、今後の国際学部や宇都宮大学の発展にとって、先生が示された研究と教育、組織運営、地域社会における弱者・文化遺産・自然への眼差しと行動、国際交流や多文化共生に関する姿勢、そして平和への願いは参考にするべきことが多いと考えます。最後に、私自身も先生のこうした活動や姿勢の多くに賛同して諸活動を続けてきました。具体的には、学内外の方々と協力して行う研究指導を軸とした専門教育、英語・初修外国語教育、教養教育、グローバルとローカルに対応する国際交流、職員組合による職場環境の改善などです。先生のご退職後も、私たちはこれらの課題に鋭意取り組み、解決に向けて前進してきました。多少なりとも恩返しのできたのではないのでしょうか。

大学や日本を取り巻く状況と世界情勢は日々厳しさを増し、解決すべき課題も山積して
います。私たちは現状の中にも誇れることがありますので、それを軸に改善・解決を
図っていく所存です。先生のように楽しむ心を持ちながら。今後も私たちをお見守り
ください。

高際澄雄先生、長年にわたりお世話になり誠にありがとうございました。とても充実
した人生を全うされたことに敬意を表し、改めて深く感謝申し上げます。

(2022年8月22日原稿受理)

研究室訪問 57 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いした
コーナーを設けました。

「互いに異なる私たちがともに生きていることの不思議」

国際学部 申 惠媛

2022年4月に着任し、挨拶文を寄稿させていただいたのがつい昨日の日のことですが、
気づけば一年半近く経ち、2023年度の前期が終了しました。この間、授業としては「多文
化共生基礎 H」「人の国際移動」「人の国際移動演習」などを担当してきました。議論と発
表が中心の演習授業はもちろんのこと、他の授業でもディスカッションやグループ発表の
機会を設け、受講者の皆さんと一緒に作り上げていく授業が多く、私自身も勉強させて
いただく日々です。この度は「研究室訪問」に寄稿する機会をいただきましたので、私の研
究内容とともに、これらの授業についても少しご紹介できればと思っています。

私の専門は社会学で、中でも移民・エスニシティ研究、都市社会学の研究に学びながら
自身の研究に取り組んでいます。これまでは特に、外国人集住地域として知られる東京都
新宿区大久保地域に観光地として出現した「新大久保」エリアをフィールドに、こうした
「エスニックな」観光地が出現したことで人々の関係はどのように変化したのか、そのこ
とは既存の地域社会のありようにどのような影響を与えたのか、という研究を進めてきま
した。

新大久保は今やとても身近な観光地のひとつになっていて、授業等で取り上げる度にそ
の知名度の高さを実感します。だからこそ、この街を対象にいったいどのような研究がで
きるのか？と思われる方もいらっしゃるかもしれません。そもそも社会学という学問自体、
その対象が漠然としているように思われることもその一因でしょうか。様々な定義の仕方
があろうとは思いますが、ひとまず社会を「異なる人間たちが、限られた空間のなかでと
もに住み合っていくことを可能にする知恵あるいは仕掛けの総体」(長谷川公一・浜日出
夫・藤村正之・町村敬志, 2019, 『新版 社会学』有斐閣, p.2) とすると、私がこれまで進
めてきた研究は、国籍や言語・文化的背景、地域との関わり方など様々な面で異質な人々
が、新大久保——より広く取れば、東京や日本ともいえるでしょうし、国境を股にかけて

生活する人々が作りだすトランスナショナルな生活世界かもしれません——という限られた空間のなかでともに住み合う状況に焦点を当て、こうした社会の現れ方（若林幹夫・立岩真也・佐藤俊樹編, 2018, 『社会が現れるとき』東京大学出版会）を捉えようとしてきたものといえます。

私が新大久保という街と研究という形で出会ったのはすでに十年以上前のことですが、当時もこの街は想像していた以上に賑やかしく、諸研究の中で記述されていた「外国人が集住しコミュニティを形成している地域」というよりも先に、最新の韓国文化が提供され、消費できる観光地としてこの街を体感したことを覚えています。観光地化は、地域社会という場で人々が取り結ぶ関係に焦点を当てる際にしばしば外部的な出来事としてみなされがちですが、日本各地から多くの観光客が押し寄せ、かれらを主要顧客とする新業種が次々と生まれるこの街で「ともに住み合う状況」を考えるためには、観光地化がどのようにして可能になっているのか、それはどのような変化をもたらしているのかにも注目する必要があるだろうと思うようになったのです。

こうした研究の経験は、「多文化共生基礎 H」や「人の国際移動」等の授業で大切にしている内容にも結びついています。たとえば、授業では新大久保のように身近な事例を実際に調べてみることの面白さを味わってほしいという点を意識しています。特に「人の国際移動」の授業では昨年度に引き続き事例調査のグループ発表を設けましたが、出身地域の自治体に取り組んでいる多文化共生関連施策、入管法改正をめぐるメディア報道のあり方、身近な／有名なエスニック・タウンの現状など、多種多様な調査結果が発表されました。こうした調査を通じて、まちづくりに関心のある学生、教職志望の学生、これから自分自身が海外へ渡り留学生として生活する学生などが、各人の関心に引きつけて人の国際移動を考え、国際移民や多文化共生が「遠いどこかの出来事」ではなく今まさに身の回りで生じていることだと感じてもらえたのは、とても嬉しい反応でした。自分にとっては遠いと思っていた事象を見慣れた風景の中に見つけることは、異なる私たちがともに住み合っている状況に気づくことでもあるからです。

同時に、具体的な対象に注目しながら、それが置かれたより広範な文脈に目を向けることの重要性についても伝えていきます。新大久保の例でいえば、この街で生活する人々の実践や日々紡がれる関係にとどまらない、そもそも日本社会や自治体がどのように国際移民を受け入れているのか、大都市インナーシティという地域特性がいかに移民の集住を促したのか、観光地化の契機とされる韓流ブームがどのように生起し受容されたのかといった、個々人の行為に必ずしも還元されない諸制度などが挙げられるでしょう。これらを踏まえることで、ともに住み合っている状況がどのようにもたらされたのか、また、それを可能にする仕組みがどのように形成されてきたのかをより深く理解することが可能になります。

先に、社会の「現れ方」という表現を使いました。多くの人が普段自らの日常を疑うことのないように、社会はそれを織りなしその中を生きる者にとってつねにすでに存在して

いる自然なもののように思われています。私たちが自分とは異なる人々とともに住み合っている状況は、当たり前のことのように生きられているのです。しかし、たとえばそれを可能にしている「知恵あるいは仕掛け」を共有しない異質な者と出会うとき、あるいはそれが組み直される場面に遭遇したときなどに、社会は現れ、手触りをもつのではないでしょう。その面白さに魅入られるもよし、より実践的に役立てる方法を探るもよし。この文章が、ますます「共生」が模索される今日において、互いに異なる私たちがすでにともに生きていることの不思議さに改めて思いを馳せる機会になれば幸いです。

(2022年8月22日原稿受理)

博士録 64 第22号から国際学部、国際学研究科に関する同窓生に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

知究人 37 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 33 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

「時の流れの中で宇大恩師への思い」

タンティミビン

知求会の皆様、ご無沙汰しております。2018年3月に修了した第9期生で佐々木一隆研究室のタンティミビンです。この度、知求会という貴重な場を借りて、先生方や知求会の皆様にご挨拶を申し上げます。わたくしは2018年3月に博士後期課程を修了した後、2018年4月に帰国しベトナム国家大学外国語大学に勤めましたが2021年からハロン大学の高度人材誘致制度でハロン大学に転職しました。現在、ハロン大学・外国語学部・日本語学科で副学科長兼専任講師として日本語を教えています。

ハロン大学は2014年に創立されており、観光学、外国語学、情報通信学や水産学などの多学科を中心とする大学です。現在、ハロン大学は幼稚園から大学までの連級があり、大学レベルでは13専攻を有し、7000人余りの学生が在籍しています。教職員は300人余り、その内博士号を持つ専任教師は40人です。県立大学ですが世界各国の大学との間に国際的協力を推進することを重要視しており、すでに、ニュージーランド、オーストラリア、韓国、中国、インドネシアなど30を超える海外の大学や国際機関とパートナー関係を築いています。

そのうち、外国語学部は英語学科、中国語学科、韓国語学科、日本語学科を設けています。外国語学科の中で、日本語教育は重点を置かれて教育されており、卒業した後クアンニン省内での就職を優先されています。今年の11月に日本文化言語センターも設立され、

日本語教育と共に、日本文化の拡大を目的とされています。特に、2023年度から、日本の元農林水産大臣武部勤氏はハロン大学の特別顧問として、ハロン大学をベトナムの東北地方のトップの大学になるようにさまざまな戦略的なアドバイスをしています。

日本語学科の日本語教師全員は日本留学経験を持ち、ベトナムの名門大学から集まっています。国外だけではなく国内大学との連携も強化しており、学業分野および教育規模の拡大に力を注いでいます。

こういった活力溢れた職場に就職できたのは他ではない、恩師の佐々木一隆先生のお陰だとしみじみ感じています。佐々木先生から、学業だけではなく、生活や精神面においても多大な援助をいただきました。日本語で執筆した博士論文の内容から日本語校正まで丁寧にご指導して頂いたこと、またゼミの飲み会にいつも出席し、ゼミの全員に励ましのお言葉をくださったことを、今でも鮮明に記憶しております。指導教官佐々木先生の他、田巻松雄先生、吉田一彦先生、高橋若菜先生、マリーケオマノタム先生、重田康博先生にも色々ご支援を頂いたことに感謝を申し上げます。田巻先生のお陰で、多文化公共圏センターの活動にも多く参加できました。芳賀町小学校のベトナム児童への支援を実施した他、外国人高校生へのガイダンスなど色々体験できたことを覚えています。これらの活動に参加したことが栃木県におけるベトナム人ネットワークを構築するきっかけとなり、現在まで続いていることを嬉しく思います。そして、宇都宮大学で勉強したおかげで、栃木県国際交流協会、宇都宮市国際交流プラザなどのベトナム語講座でもベトナム語を教えることができました。また、今でも日本で構築したネットワークを持続しており、博士論文に協力していただいた日本におけるベトナム人家族と繋がっています。

日本で様々な経験をし、現在に繋げることができたのは、宇都宮大学大学院国際学研究科の素晴らしい先生方からのご指導・ご支援を受けたからに他なりません。これからもビリーフを持って選択した道に歩み、多文化共生という社会を目指して努力したいと思います。そして、宇都宮大学大学院国際学研究科の先生方が更なる素晴らしい種を蒔いて、日本や世界の各地に強い信念を有する人材を育成し続けると信じております。

(国際学研究科 博士後期課程 国際学研究専攻 第9期修了生)

(2022年8月1日原稿受理)

海外留学今昔 32 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者および海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 23 知求会ニュース第41号より現役学部生・院生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南15 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「国家公務員としての心構え」

小島 周一郎

私は宇大国際学部を卒業してから、かれこれ20年近く公務員として働いています。今回は公務員として働くにあたり、私なりの大学時代、どのように過ごしてきたか（自省も込めてですが・・・）の心構えについて、学部生の方に限られた字数で少しでもお伝えが出来ればと思います。

はじめに、公務員になりたいきっかけの1つとして、国のため、住んでいる地域のために働きたいという思いがあるかと思います。かくいう私の場合、国際学部に入學した当初は世界的な規模で活躍する国際公務員を志望していました。国際学部での幅広い授業科目を学ぶ中で、県内市町村を対象にしたフィールドワークや、当時国の施策として推進していた市町村合併について学んでいく中で、特定の地域のためではなく、日本全体の視点に立った地方の活性化、地方を元気にしたいという気持ちが強くなり、国家公務員として働くことを志しました。国際学部では興味・関心を持った分野を幅広く学ぶことが可能であり、広い視野や高いアンテナを身につけたい人にとって、ここでのカリキュラムは大いに可能性を秘めた環境であったと思います。

加えて、大学時代は時間が無限にあります。これを読んでいる学部生の方はそんなことはない、と感じる方もいるかと思います。私も大学時代に年長者からそんなアドバイスを言われたこともありましたが、ただ、当時はその言葉の意味について、いまいちピンときていませんでした。後に社会人となり、その言葉の意味を今となって身に染みて感じているところです。大学時代の時間の使い方を自分でどのように組み立てるのか、勉強やバイト、旅行、友人と遊ぶ、逆に何もしないということでも、何でも良いと思います。一度振り返り、考えてみることをお勧めします。その積み上げが糧となり、自分の経験値となり社会人として生きていくための大切な武器になるかと思います。是非大学時代に様々なことにチャレンジしてみてください。一歩踏み出してみた上で、立ち止まることや状況により一度引き返してみた経験も含め、大学時代には十二分な時間を持ち合わせているはずですよ。

以上、思うがまま、私としての思いを徒然に書き記しました。多少なりとも皆さんの進路選択の一助になって頂ければ幸いです。無限の可能性を秘めた環境である宇大国際学部で、大学時代にみなさんがどのような武器を得たのか、どこかでお会いして話すことが出来る機会を楽しみにしています。

(国際学部 国際社会学科 第5期卒業生)

(2022年8月6日原稿受理)

フォーラム 2023年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。（原稿集めに苦労しています。）

「まちづくり」との出会い

特定非営利活動法人宇都宮まちづくり市民工房 理事長

安藤 正知

2004年3月に国際学研究科国際社会研究専攻を修了してから早いもので18年が経ちました。在学中に当時の宇都宮市民活動サポートセンターで非常勤スタッフとして働き始め、2005年にはNPO法人宇都宮まちづくり市民工房の立ち上げに参加し、以後「市民主体のまちづくり」の実現を目指して栃木県内を舞台に活動してきました。

私とひらがな5文字の「まちづくり」との関りは、恩師である北島滋先生との出会いから始まります。当時NGOの勉強をしたいと社会人学生として宇都宮大学大学院に入学し、北島研の門を叩いたとき、先生は「僕は来るものは拒まず、去る者は追わずだよ」とにっこり笑って受け入れて下さいました。正直NGOとNPOの区別もつかなかった私ですので、北島先生には感謝しかありません。そして、在学中にゼミ仲間と「ホッと・雷都・HOT」という団体名で活動したのが「まちづくり」への第一歩となりました。懐かしい思い出です。

さて、「まちづくり」についても触れないといけませんね。

私たちの生活には、大小さまざまな課題があります。あるものは顕在化し、あるものは目に見えない、あるいは気づかない状態で、でも確かに存在しているのです。子育て、介護、いじめ、不登校、DV、貧困、社会的孤立……。さらに生まれ育った環境が格差へとつながり、その格差は再生産し、あるいは拡大していきます。こんな日本社会を「すべり台」と形容した人もいました。ベビーカーや車いすで公共交通を利用することは迷惑でしょうか？ダブルワーク、トリプルワークをしても貧困から抜け出せない社会、姥捨て山を望む社会は健全でしょうか？メディアではさまざまな意見が述べられていますが、すべり台で下まで滑り落ちない仕組み、落ちたとしてもまた昇れる仕組みは、誰がどうやって作るのでしょうか？

政策により解決に取り組む方法があります（公助）。自らの努力により未来を切り開く人もいます（自助）。でも、公助と自助だけですべてを解決できるわけではありません。あらゆるサービスをお金で換算する資本主義社会では、お金を生み出さないと切り捨てられてしまうからです。貨幣経済を否定することはできませんが、生活の中でお金を介在させない部分をつくり、お互い様を合言葉に、人と人がつながっていくこと、それが「まちづくり」だと思います。

まちづくりの担い手もまた、この20年で多様化してきました。多くのボランティアグループが活動してしますし、NPO法人、一般社団法人、労働者協働組合など組織の選択肢も

増えました。共助・互助が当たり前、そんな社会を目指して「まちづくり」のすそ野がさらに広がることを願って、これからも活動が続けていきたいと思っています。

(国際学研究科 修士課程 国際社会研究専攻 第4期修了生)

(2022年8月18日原稿受理)

東南アジア支部だより

知求会ニュース第63号から、タイ在住の**大畑美優紀**さん(国際学部社会学科第1期生・国際学研究科国際社会研究専攻第1期生)が発起人となり、国際学部同窓会および大学院国際学研究科同窓会の東南アジア支部としてニュースレターを創刊しました。2019年4月から、年4回から**年2回発行(4月1日、9月1日)**の変更になりました。

今回の東南アジアだより第16号の内容は、1. ご挨拶 2. 交流報告 3. おしらせ 4. 創設6周年記念特別企画 5. トコロ変わればザ★談会(第9回) 6. タイの昨今(第16回) 7. 狙え!インスタ映え!?(第12回) 8. とともに感じる東南アジア(第12回)です。

EU支部だより

知求会ニュース第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の知求会EU支部だより「Newsreel World」47号の内容は、1. イタリア ローマのコロッセオに落書きの「現行犯」の動画公開、訴追 2. イタリア コロッセオに名前を刻んだ観光客、警察が身元特定 3. EU支部だより ―観光資源の保護と落書き問題―です。

編集者のひとりごと

●皆様にお詫びします。同窓会事務局のメールアドレスを chikyukai@freeml.com としていましたが、freeml by GMO が2019年12月2日12:00を持ってサービスを終了していたことを把握していませんでした。過去に、旧メールアドレスへ問い合わせなどをした同窓生におかれましては申し訳ありませんでした。再度、新規のメールアドレス(chikyukai@gmail.com)へ送信していただければ幸いです。

●まだまだ暑さが続きますので、皆様お体ご自愛下さい。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっています。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@gmail.com

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会